
剣豪を目指す道

メラメラメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣豪を目指す道

【Zコード】

Z5234T

【作者名】

メラメラメ

【あらすじ】

史上最強の弟子の世界に転生した主人公が、眞面目にその世界で生きていく事を目標に頑張つていく物語

これは松枝名 俊 様の史上最強の弟子ケンイチの一次創作です。

プロローグ（前書き）

注意 作者が未熟なので変な所があるかもしれません
基本的作者の自己満足の作品なので、『都合主義の要素が含まれます

ご都合主義などの要素が嫌いな方は読まない事をお勧めします。

プロローグ

荒涼高校一年入学して一ヶ月経つた日

長かった・・・

そう考えている俺……佐々木一騎は余りにも未熟だった。この史上最強の弟子の世界に転生したがいいが、Fateのアサシンの能力を貰った俺は、自分が強いと慢心し、達人に挑みあえなく敗北した

其の頃から地獄だった

毎日剣の修行と称し拷問のような日々、ある日は、急に刀を持たされ、重りを付けられた状態で組み手、そしてある日は重りを体中に付けられ水の中に沈められたり、そして、今も組み手の真最中であった。

「参る！風三連」

体を前進しつつ、前方の扇状に下、上、中に刀で三連突きを行う、その一つ一つは確実に人体の急所を狙っているが、対峙している相手が悪かつた。

「…あまい」

そう一言告げられ、三連突きは敢え無く、刀で弾かれ、その少しの隙に、手裏剣を放ってきた

手裏剣は、あくまで牽制と思われ、直接には襲つてこないで、顔のすぐ真横を通り過ぎていった

じわり、と汗が額から流れ落ちる。だが一瞬でも気を抜けば、すぐにまたやられる。自分の持っている刀は、太刀と呼ばれ、自分の身長と同じくらいの大きさを持つた刀だ。下手に振れば、そのぶん隙が多く、その間に反撃されれば一瞬で終わりだ。これだけは気をつけなければならない

ならば

「石花！」

太刀を少し斜め上に斬り払う。太刀の大きさをうまく使つた技で、前方を大きく前動作などなくノーモーションで高速で刀を振るう更に

「覚悟おおお！ 雀刺し」

刀を前方に低い姿勢で持ちながら移動しつつ斬つていく。だが、それも、やはりというか弾かれしていく。このままいけば負けることは間違いない、なら最後にやるとしたら派手に決めるか。

「ぬおおおお

弾かれた刀を全力で元の位置に戻し、突き刺すように構えなおす。直後、相手がこちらに、走ってくる

走っているにも関わらず、きつちり刀を構えながら向かってくるのを見て思わずため息が出る。

「まだ、終わるわけにはいかん！」

必死に刀を向かってくる相手に、連續で突き出していく。ガキン、ガキン、金属がぶつかる様な音が響いていく。

すぐ目の前に迫つてくる相手に、渾身の突きを突き出す。

ビュン

鋭く風切り音が出る中、刀はむなしく中を斬った

それと同時に首に衝撃がくる

「…無念」

「最後の…よかつたよ」

先ほどまで戦つていた相手の声を最後に意識を失う

プロローグ（後書き）

はあ・・・やつちやつた感しかしない・・・

第一話（前書き）

さくら

名前が間違っていると報告を受け修正

第1話

第1話

「へへ、また負けたか」

呻き声を上げながら、起き上ると、見慣れたベッドにいる事を気づいた

「おやおや、今田もやられたのか」

後ろから聞きなれた声の主がやってくる

「ああ岬越寺殿。毎度の事ながら、すみません」

「御安い御用さ、それにしても、手加減していふとはいへ、しぐれに攻撃を当てるなんて凄い進歩じゃないか」

「進歩ひじれくらいでですかね？」

「せうだね～蟻が蝶になるくらいの進歩だね」

今話している人は岬越寺 秋雨、【折掌する柔術家】の異名を持

つ岬越寺疏柔術

の達人。書画・陶芸・彫刻・演劇・音楽・茶道を何でもこなし、それに医師の資格も

持つていて、いつも怪我をしたときは世話をなつている

「当てましたつけ？」

「君の最後の一撃がしげれの服に掠つたんだよ。それと学校遅れる上」

そこまで言つと岬越寺は怪我の具合を見て退出していった。
改めて辺りを見渡し、時計を見ると学校の登校時間があと少しで終
わりを迎える
時刻であった。

「やばいな」

急いで病室から駆け出て、廊下を走つていく

「まつほつほ、こつちやんも朝から精が出るのあ」

「あ、長老殿。おはようござます」

庭先を走つていくと立派な髭を生やした巨体の老人がいた。この老
人はこの梁山泊といつ

数々の豪傑達が集まる。ここを纏め上げる長老、【無敵超人】の異
名を持つ武術の達人

門までつくと、自分に刀を教えてくれる師匠、香坂 しぐれ がいた。

【剣と兵器の申し子】の異名を持つ香坂流武器術の達人だ。東洋では最強と呼ばれる

ほどの武器使いである。

この世界に転生した初期の時、アサシンの剣技を受け継いだ俺は自らが最強だと思って

東洋では最強と言われた武器使い…香坂 しぐれ に挑み惨敗した。

負けた理由は、慢心もあるし、最強だと自惚れていた俺は鍛錬をきちんと行っていなかつたこと、など色々有る

惨敗した時から鍛錬をするようになり、修行しては挑み、修行しては挑みと繰り返している

内に、いつのまにか、弟子にされていた。今日も朝早くに、日本刀を持ち出して挑みにかかつたが、一撃当たるようになつたくらいで負けた。

「しぐれ師匠、おはよしぐれこまわ」

「うそ…おはよ」

「では、いつできまーす」

「帰つて…きたら、また続考…だ」

その事に一瞬、顔を引きつると、師匠の肩に乗つていたネズミ?が
降りてきて
小さなヌンチャクを振りまして、修行をやれ　と言つているような
動作をする

「鬪忠丸、分かつたから、そのような動作をするな」

「チユチユ」

鬪忠丸は、それっきりまた師匠の肩に登つていった。この鬪忠丸は、
正直、下手な
人間よりも頭が賢く、師匠の相棒を勤めている。本当にネズミか?
これと思つことが
多々ある

常人では開けれないと思つ、かなり重い門をなんとか開けて、学校
に向かっていく

途中、同じクラスの同級生が学校に向かって走つているのを見つけ
た

「兼一殿、寝坊か?」

「え…やあ佐々木くん」

後ろからの声に反応したらしく、振り向いてびっくりしながら返答
していく

この白浜兼一は、今はまだ苛められた子だが、この世界の主人公で、才能が無いにも関わらず、不屈のよつた心で頑張る青年だ

「では、私は先に行くぞ」

「あつー!待つてよ佐々木くーーん」

足に力を込め学校に向かって走っていく。修行のお陰で兼一とかなりの差をつけて走つていった。

なんとか時間内に学校に着いたが健一は間に合わなかつたらしく、教師が先に教卓についてしまつた。

教師が何か言おうとした時「おはよつゞやかこまへすーー」と廊下から声が来た

やはりといづか、兼一であった。兼一はそのまま教師に追い出されるように教室から出て、廊下で立つことになつた

「あ、途中だつたな。彼女がこのクラスに転校してきた風林寺美羽

君だ！――

ん！？あれは確か長老の孫だったかな？直接的に話したこと無いが師匠に挑む時に何回か見たことがある。

それからうつむくのは、半ば黙りうつむきで授業を聞き過いでいった。

「こひらあー…佐々木寝るなあ！」

訂正、授業を寝て過いでいた

たまに飛んでくるチョークを避けながら寝むとこいつ凄技を出しながら授業を終えた

「兼一殿、また空手部に行くのか？」

放課後、兼一が所属しているとこ空手部がある校舎のほうに向かっていく健一を見て呼び止める

「あ、佐々木君、まいかなきやならないしね」

「あのよつな所、やつて辞めたほつがこいとゆつのだが」

「そうだぞ、フヌケンジリせ続きやしないんだ」

兼一に空手部を辞めるよつ説得するが後ろから追撃するよつな言葉
が飛んできた

「む、これは新島殿か」

「なんだ、佐々木か」

新島春男、兼一の友人？いや悪友らしいが、学校では良くも悪くも
平均を保ってきた私
には特に反応を示さない

あー、このあと師匠との訓練があるんだった。速く家に帰つて準備
していかねば不味い

「急ぎの用があるので、ではな」

ステータス（前書き）

修正、修正

ステータス

佐々木一騎

クラス アサシン

性別 男性

身長 172cm

体重 65kg

筋力 D 耐久 E +

敏捷 C 魔力 E

幸運 C +

追撃 : D

離脱行動を行う相手の動きを阻害する。

相手が離脱しきる前に、一度だけ攻撃判定を得られる。

蛮勇 : E

向こう見ずな傾向。

同ランクの勇猛効果に加え、格闘ダメージを向上させるが、

視野が狭まり冷静さ・大局的な判断力がダウン

直感：D

戦闘時、つねに自身にとつて有利な展開を”感じ取る”能力。
攻撃がある程度は予見することができる。

気配遮断：C

気配を断つ。隠密行動に適している。
完全に気配を断てば発見する事は難しい。

燕返し

対人魔剣。最大補足人数・一人。同時に発生させる三つの斬撃の円
によつて相手を断ち切る絶技。
多重次元屈折現象というもののひとつらしく、ゲイボルグとは違つ
た意味で回避が不可能な技である。

史上最强の弟子の世界に転生した人、転生当初は自分が最强だと自
惚れており、達人の香坂しぐれ に挑み
惨败した、当初は無謀にも達人に挑みかかっていたので、達人と戦
うことでの、自分の力量を知り、無謀な事
や慢心などがしなくなつた。これにより蛮勇がAからEに下がつた

原作知識に関しては徐々に失つてゐる
目上の人には敬語を使つたりする

第2話（前書き）

なんとか書き終えた・・・けど馴文

第2話

第2話

今日も今日とて早朝に挑みに梁山泊に行つたが、やはりといふか返り討ちに。

仕方なくボロボロの包帯だらけのまま、学校に行くことになった。

いつもと違つて、今日は登校する時間が早く歩いても間に合つてもうなくらい時間が余つていた

原作では、確か兼一殿が梁山泊に弟子入りするんだつたか？いやどうだつたか

学校に着くまでの間、原作を必死に思い出そうとするが、もう記憶がはつきりと覚えておらず

中途半端な所しか思い出さうにも思い出せないでいた。

それもそのはず、もうこの世界にきて16年経つているのだ。前世で読んだ物 자체だいぶ忘れてきているのだ。

普通の人ならそれを何かに記したりするだらうが、あいにくだいぶ忘れてからその事を思い出したので
後の祭りだ。

そういう考えているうちに荒涼高校に着いていた

余りにも早すぎるるので校舎の中をきちんと場所を把握しようと、うろついていると、明らかに不良がいますよ的な部室を見つけた。そこには美術準備室と書いているが壁には、らきがきのような物が施され、無残な部室になっていた。

「やはり、こういう所もあるのか」

美術準備室を一瞥して、次の場所を把握しにいこうとした。その時、後ろから何者かに肩を掴まれた。だが、それに特に反応することもなく、前に行こうとすると肩を掴む力が強められ、振り向かせようと引っ張ってきた。

「どうかしたかじやねえ！」
「行料払えよ！」

引っ張ってきた者に対し、聞いてみたが、返ってくるのは明らかに挑発めいた言葉のみ
仕方なく振り向いてみると、不良めいた男が10人、何人かはバットなどの鈍器を持ってこちらに、ふざけた笑いをしている。

「断るといつても？」

「へえ俺らとやつひつてのか？」

「げへへ、やつちまおうづぜ」

断りの一言を入れた瞬間、不良達は一斉にバットや木刀などを構えて取り囲むように移動していった

先ほどのリーダー格と思わしき、話していた不良は話を終わつた時に金属バットを片手に殴ってきた

さらに他の不良もそれに追随するよじバットで殴りかかつてくる

「ふん！」

「ぐう」

木刀で殴りかかつてくる不良を、カウンター気味に拳を鳩尾に入れ、倒れさせる

そして即座に木刀を奪い取り、殴りかかつてくる不良達に木刀で一太刀の元、氣絶させていく。

途中「ぐえ」「うふあ」など呻き声を上げていくが、氣絶しなかつたものには、さらに木刀で叩きのめしていく。

「さて残りはお主だけだぞ？」

「ち、ちくしょお

最後に残つたのは、先ほど喋っていたリーダー格のみ、いやわざと
残らされたいたんだ。
リーダー格の不良は周りに倒れている不良たちを見て、自分が不利
になつたことを悟り
顔を青くしながら駆け逃げていった。

「ふむ、もうこんな時間か」

時計を見ると生徒達がだいたい揃つ時間になつており、教室に向か
うこととした。

だが、先ほどの事を見た人がいるといつ事を知らずに……

S i d e ? ? ?

「キッヒッヒ、まさか佐々木がこんなにやるとは知らなかつたぜ
え、ガクランに修正
いれないといけないぜ」

懐から学園ランキングという物を取り出して、密かに呴いた

第3話（前書き）

大幅修正しました～

第3話

第3話

教室に着くと教師が既に教卓に着いていた

ガラガラ、教室の扉を開ける音に、反応して何人かの生徒がこちらを見てくる

「なんだ〜佐々木、遅刻か廊下で立つてなさい」

「承知」

一言、応答の言葉を言い、そのまま教室に入らず、廊下で立つていることになった。

しかし、ただ廊下で立つのも余り味気ないので、壁に耳を立て、朝の会がどのくらい終わったのかを聞いていた。

そこへもう一人の遅刻者がやつてきた

「あ、佐々木君も遅刻か」

「兼一殿もか…」

それだけ言つともう一人の遅刻者、白浜兼一は、教室に入りにいった。

案の定、兼一は黒板消しを当てられ、教師に怒鳴られる中廊下で立つ事になつた
まあ無理もない。今日で二人目なのだ、教師も一人目ならまだしも
二人となると怒鳴りたくなるだろ？

「災難だな…」

「うん…佐々木君も災難だね…」

横にいる兼一に慰めの言葉を言い、遅刻者同士、仲を深めていった。

相変わらず眠たくなるような授業（特に英語とか、特に英語とか、特に英語とか）を

聞き過ごしていき、昼休みになつた。

今日は師匠が持たせてくれた弁当を食べてみることにした。

「なんだ…この盛り付け…」

弁当箱を開けると、絶妙な位置に積み重なっている餃子、「」飯も「」角のよくな形になつていて、「」これをお握りとは言えないくらいだ。

「師匠…これは一種の修行ですか……」

仕方なく餃子を食べてみようとするが箸を付けた瞬間崩れ落ちた。幸い弁当箱が大きかったお陰で餃子は助かったがなんとも言えない気持ちに…

「あ、意外と美味しいな」

崩れた餃子の中から一つ餃子を箸で取り出し食べてみたが、ほどよく焼けていて美味しかった

結局お握り?も食べて、餃子も食べきってしまった。
ただ…ただ一つ残念だとすると盛り付け方が駄目だ…

午後の授業も適当に聞き過(?)し放課後

「ではな、兼一殿」

「あ、うん、また明日～

軽く帰る事を伝えて学校を出る。ちなみに部活はやつていない。連日放課後や早朝に修行に師匠に挑みにいくからだ。ただでさえボロボロにされているのに部活をやれば、体力などもったもんじゃない。

いつものように自分の家に帰ろうとするが、前方から人が何人かきて、進行方向を塞いでしまった。よく見ると今朝倒した不良達がいた。しかし、数は今朝倒した数よりも遥かに多く数十人にものぼる数であった

「よお今朝はやつてくれたじょん

「はて?何のことかな?」

「ちつー!てめえー!」

あの時逃げたリーダー格の不良が前に出てきて不適な笑いをしてくる中、話をしようとしてくるが軽く挑発をすると、短気ならじへん手に持っている鉄パイプで殴りかかるてくる

「おつと

「避けるんじゃねえーお前らもやつちまえー。」

鉄パイプを避けると、それに怒った不良は周りにいる仲間に命令する

しかしながら、数が多い。さらに相手は鉄パイプ、金属バット、木刀と凶器

を持つていて、こちら鞄だけと丸腰に近い状態だ。

他の不良達も各自の武器を持ち襲ってくる中、大振りで武器を振りかぶってくる

者を徹底的に狙いをつけ、腹にカウンター気味にパンチを入れてい

く

「ぐふ

「こんな事なら田々の護身用武器も持つてあくんだったな…」

次々と、襲い掛かってくる不良達を後田に、倒れている不良の木刀を奪い、突き刺すように構える

「一芸、披露仕る」

風流し

殴りかかってくる不良を木刀で受け流して、よろけている所に木刀で止めを刺す

もう地面に沈んでいる不良は裕に10人は超えており、残っているものも、だんだん

戦意を喪失していつている

「どうした？こないなら此方からゆくぞ！」

動きを止めて、戦意を喪失しかけている者に向かって走り出す。途中倒れている不良

を何人か踏んだ氣もするが、そんなの知つたこっちゃない

「はあ！」

手に持つていてる木刀で顎を鋭く突き、昏倒させていく。もう木刀は、金属バットなど

を受け流したりしていたので、鱗が入つて折れそくなくらいになつていてる。

「ふう、これで終わりか」

最後の立つてゐる不良を沈めさせ、一息ついた直後

ガツ

何かに反射的に体が反応し、木刀を盾のように体の後ろ側にやる。そうすると、それから

ほんの数秒後、木刀に鋭い重みがくる。
どうやら、まだ不良のリーダー格が完全に沈んでいなかつたようだ
振り返ると、金属バットを両手に、動搖している不良がいた。

「ふむ」

動搖している不良に目掛けて、体を前に出しながら、木刀を鳩尾目
掛けて、突き出した

バキイ

「グエ」

木刀が不良の鳩尾に当たつたと同時に鱗が入つてた部分から、もう
使いようにならないくらい。完膚なきまでに折れた。木刀を鳩尾に
完璧に食らつた不良は、口から泡を吹き出しながら氣絶していった。

「短い間だつたが世話になつた。」

元はといえば不良の一人が持つていた武器だったが、少しの間戦つ
てきた木刀に別れを告げ、木刀を
捨てる。

しかし、たかが不良如きにこんなにも時間がかかるとは思わなかつ
た

腕時計を見ながら、自分がこんなのが相手にどれだけ時間が掛かったのかを見て、修行が足りないと改めて思う。自分が再起不能にした不良達を通行人の邪魔にならないよう、適当に路地の中に一人ずつ放り込んで、修行をしに、梁山泊の所へ向かう。

第4話（前書き）

ははは、大幅修正だ。しぐれさんの喋り方難しいです

第4話

第4話

「師匠、流石にこれはきついと思ひやぞ……」

「大丈…夫」

大量の重りを付けられた状態で師匠との打ち合いでどうしてこんな状況になったかは、簡単な事だ。

あのあと梁山泊に着いたのだが、師匠の所へ向かっている途中、岬越寺殿に遭遇しほんの少しだが不良との戦いの時に、顔についた傷を言われ、何があつたかを執拗に聞かれ、思わず答えてしまったことから始まった。傷といつてもほんの擦り傷なのだが……

岬越寺に重りを大量に体に付けられ、その状況で師匠と打ち合いをしろと言わってしまった。

自分の未熟は認めるが、これは余りにも酷すぎないか?…

ビュ

少しでも油断をすれば、風切り音と共に顔のすぐ横を刀が通り過ぎていく。
ははは……

少しでも抗おうと、体と同じくらいの大きさの太刀を袈裟斬りから逆袈裟斬りなど、太刀をベクトルがバラバラ斬り方をして師匠に攻勢に出られないよう、できるだけ自分から攻勢に出て、攻める。

ただでさえ重りが重くて攻勢に出るのがきついのに、その状態で守勢になると、相手が手加減しているとはいえ、この長い太刀では防ぐのはきついだろう。

師匠に、斬りかかりながらも、太刀に力が入るように全身を合わせながら、長い刀を生かして、太刀を師匠に一定の距離を保ちながら、斬戟を放っていく。

だが、まあそれもいとも簡単に師匠が持つ刀に防がれる。普段の自分だったら、もう少し良く戦えただろうが、今は重りのせいで太刀を振るうのがせいいっぱいだ。

ヒュ

またも、師匠の刀がすぐ横を通りすぎる。必死に体を逸らしたおかげで傷が負わなくてすんだが、今の絶対怪我するだろ……

「し、師匠、何か怒つてませんか?」

「ん…別に…」

絶対何か怒つてる……しかし何か怒るような原因があつたか?一刻も早く怒っているなら怒りを冷まないと、この状況はやばいしかしながら、今まで、怒らせるような事したつけ?…時々馬剣聖殿と一緒に梁山泊にある風呂を師匠が入っている時間に覗きにいった事ならあるが……

だが、それも必ず失敗に終わるし、いつも馬剣聖殿に風呂に向かう時のトラップの盾にされるだけだし……

あ…それか

この覗きの件がバレタのか…、いや、でも馬剣聖殿が覗きとして師匠に捕まっているから大丈夫なはず…だと思いたい。馬剣聖殿が捕まつた時に見捨てたから。もしかして売られた…？

この間役十秒、襲い掛かつてくる刀を全力で避けながら、考えていく
「師匠、覗きの件は申し訳無い思つていい…どうか怒りを収めてく
ださい」

刀を避けた瞬間、持つている太刀を横に置き、土下座をしながら謝
る。今まで持つていた誇りを捨てた
見事な土下座だ…

「違う…」

へ？

「では、何か怒らせるような事しましたつけ…？」

おそるおそるとこった感じで、訊ねる。もちろん、土下座をしてい
る状態でだ。この状況で軽率な行動をすれば、怪我をする事は確定
である。

「自分…の弟子…がこの有…様じや情けない…と思つて…な

「も、申し訳ない！」

「 もう……いい……」

「 へつ?」

顔を上げると、手にはまだ刀を持つている師匠がいる。とりあえず横にある太刀を手に持ち立つと師匠が言つ。

「 今からやる……事……避け……」

そう言つた瞬間、師匠の刀が襲い掛かってきて、それを太刀で受け止めようとするが、受け止めた瞬間師匠が、太刀の弱点である懷に入つてきて、そのことに反応できずに首筋に鋭い痛みがきて終わつた

「 覗……きの覗……だ……」

師匠のその言葉を最後に氣を失つた

「 岬越寺殿毎度の事ながら申し訳ない……」

「 いや、 いりつて事ぢ、 それと君の新しい修行メニューができたらしい」

「 も、 もうしきつくなると申すのか……」

「 フフフ」

岬越寺殿が意味深な笑みを浮かべながら治療して去つていき、自分

はさりにきつくなると思つ修行には少し憂鬱な事を思った。

治療をしてもらったので、梁山泊から自分の家に帰ることにした
意外と梁山泊に近く、徒歩で5分程度で着く

自分の家は、昔の武家屋敷のよつたな家で、両親はいなく、一人で住
んでいる。

正直、かなりの大きさの家に一人だけという状態だ。

師匠の修行が無いときは、よく庭で愛刀の素振りをしている。愛刀
とは、アサシンこと

佐々木小次郎が使っていた物干し竿である。
いくら剣技を受け継いだとしても、まだ剣技に体がついていけず、
無駄な事になつていて

この家には、もう既に16年住んでいるということになる。
正直5歳の時まで記憶がなく、両親、親戚という物は一切無かつた。
5歳で一人暮らしという
のも、変だらう。

幸いな事にある程度大きくなるまでの食料などは家あり、それを食
べて過ごしていた

10歳辺りになるまで、他人とは、会つていなく、ずっと刀を振り
続けるという事だけ、必死に
やつていた。

「修行帰りだがやるとするか…」

物干し竿を上段に構え、練習用にいつも使っている大きな木に向かって袈裟斬りをする

それだけでは、本来この物干し竿を使っている佐々木小次郎には程遠く浅く木を斬らざるだけであつた。

本来の持ち主ならこの木を両断するのも意図も簡単にできるだろ？

「風三連！」

木に向かつて前進しつつ、扇状に下、上、中の順番に鋭い三連突きをする。その威力は木を次々と抉つていくが、貫通まではいかずに終わつた。

それからといふものは、袈裟斬り袈裟固めなど基本を反復練習していった。途中、ふらつと目眩がして、体を地面に倒してしまつ。

「やはり疲れたなあ」

地面に体を預けながら空を見上げる。そこには夜の空が広がつており、雲などなく漆黒が目立つ世界であつた。
しばらく、空を見続けたあと、ぼそっと呟いた

「師匠は、この剣が殺人剣だと知つたら軽蔑するだろ？」

そう、佐々木小次郎の剣技を受け継いだという事は、佐々木小次郎

が人を殺す為に、剣技
を生み出した剣を受け継いだということ。

「まあ今はいいか…」

重い体を起こして、武家屋敷の寝室に向かい、今の事を、心に刻み
込むように思いながら
寝る。

朝、昨日の事を自嘲気味に笑いながら、私服のまま学校に向かう。
昨日の疲れは無くなつており、いつもどおりの姿であった。荒涼高
校は私服、制服

どちらでもおくな学校であり、基本は制服でいくが、今日は私服で
行くことにした。

さらに、背中には竹刀袋を持っていて、その中には不良に絡まれな
いように木刀を入れている

いつもどおりの通学路を進んでいき、学校に着くと、びっくりする
ような噂が飛び交っていた

白浜兼一が空手部の大門寺まこと、に空手部の所属を掛けて一週間
後勝負をするという事

1・Eの教室に着くと、その件の人物が机に沈んでいた。

「兼一殿、骨は拾つてやる……」

「最初から負けるような事いわないでよおお」

白浜兼一は、負け前提で言つた事に、少しほは腹を立てたのか、こち
らに言い返してくる。

だが、兼一が喧嘩を売つた相手と言つと、過去3人病院送りにした
いう、問題児に喧嘩を売つたのだ。

そこへもう一人の人物が近づいてくる。

「あ、兼一さんと、えつとっ？」

「佐々木一騎だ、よろしく頼む。風林寺殿」

「あ、はい、よろしくお願ひします。それと空手部はビリビリしました?」

「ボクはもうおしまいです……」

さつきまでと偉い違いよつだな……。まあ勝利が絶望的といつのは変
わらないが、しかし、兼一殿の話を聞くと

強者のみに武術をやる資格がある、か……まあ裏に潰かっていない表

の住民ならそういう考え方の輩もいるか。

だが、友人がやられるのを黙つてみるつてのも駄目だな
さらに問題児の不良なら周りに取り巻きがいるのも確実だ。

「風林寺殿、少し兼一殿を頼む」

「え、ちょっと」

返答の言葉も待たずに、大門寺という輩を調べにいく。

案の定、その男は、校舎裏にて数名の男と絡んでいた。見ると大門寺という男は、その数名の男に、媚へつらっている
ように見える。

気配を遮断し、なりゆきを見つめると、大門寺のバックのような不良組織があるらしい、恐らく大門寺、他数名はその組織の構成員か何かだろう。

集まりが終わつたらしく大門寺が去つた所で、数名の男達に気配を遮断したまま近づき、その前に出て気配を現す。

「なつーてめえどこから現れた！」

「流石に友人がやられるのも見過せないのでな、ここで退場お願
い仕る」

手に持つて いる木刀で一人の男に、袈裟斬りをする。その男は、突然の事に何がなんなのか、分から ないという表情でわき腹を木刀で斬られ倒れ伏す。

「うひあーー！」

一人の男が此方に飛び蹴りをしてくる

風流し

ひらりと飛び蹴りを受け流し、飛び蹴りが失敗してよろけている所に、鋭い突きをする。

「！」ふっ

その男は此方を睨む様な目つきをしながら、倒れ伏した。
その他の男達も、一人倒した事によつて蜘蛛の子散らすように逃げ出していくた。

「これでいいか…」

これで大門寺とやらは、もう不良のバックや取り巻きが存在せず、一人になつた。
あとは兼一殿が勝つてくれればいいのだがな…

第5話（前書き）

この話は修正しようがない...

第5話

第5話

一週間後、兼一の最後の日が間違えた。兼一の試合の日

授業はいつもどおり聞き流して、放課後、気配を遮断して空手道場に向かい。

空手部は、主に態度が悪い奴など大勢いるから、普通に、違う部の生徒が見学にいつたら

目を付けられてしまう可能性がある。

「はじめ……」

審判を勤める、短髪の男が声を上げる。

それと同時に、大門寺が腰から力を込めた拳を兼一に突き出した。兼一はそれを腕を十字にして、受け止めるが、兼一の体はまるで、紙のように、吹っ飛んだ

「場合によつては、兼一殿を援護せねば……」

審判に場外と宣告された兼一はまだやると、答える。だが足がまだ震えている。だが雰囲気が変わった！

兼一は突き出された拳を、自分から前に出て、大門寺の背後に回つた。

あれは…中国拳法！

確かに扣歩・擺歩だったか、攻撃を躱すための八卦承の歩法だったはず、ふと上を見ると風林寺美羽が此方に手を振つていた

「なるほど、あやつが、兼一殿に入れ知恵をしたのか」

フツ

此方も不適に笑うと、驚いたような顔で見てくる。しかし、躱しているだけでは倒せないぞ
兼一も分かつてているのだろうか。

大門寺の拳を避け、右わき腹に兼一の今の最大の攻撃とも言える拳を入れた

だが、普段鍛えていない兼一の拳では筋肉の壁を崩せずに、そのまま足蹴りを食らつた

そのあとも兼一は避け続け、殴り続けている大門寺は疲れてきているようだ。

大門寺の拳を避けた後兼一はまた、周りにまつとした時大門寺の足に、兼一の足が辺り
投げ技の要領というか、足を引っ掛けさせたというか、それで大

門寺は倒れた

「これなら、兼一殿も大丈夫だな…」

そう相手はもう疲れきつており、さうに兼一は先ほどでの何かを掴んだような表情をしている
恐らく、もう兼一の勝ちだらう

そう考え、空手道場を離れると、先ほどの風林寺美羽がこちらに姿を現した

「風林寺殿も物好きだのあ」

「そういう一騎さんは、兼一さんの事ずっと見てましたね」

「フツあのような道化のような輩は今時珍しいのでな…あの技を教えたのも風林寺殿だらう…」

「ええ、兼一さんは、今時珍しい努力をする人ですもの」

「ではな、しぐれ師匠によろしく頼む」

その一言で美羽の顔が驚きの表情になつたが、そんな事お構い無しにその場を去つた

帰り際に、空手部の審判をしていた男の悟ったような表情を思い出しながら、梁山泊のしぐれ師匠の所へ向かう

闇話（前書き）

軽く修正。

この世界に、転生して10年経った

近所の不良とかも、もう俺には喧嘩を仕掛けてこないで、逃げるだけ

昨日、高校生の不良も、絡んできたから木刀で気絶させてやった。
同年代は皆俺を恐れて

近寄つてこないし。

流石、アサシンの剣技だぜ

体がまだ小さくって物干し竿使えないけど俺はもう達人にも勝てる
んじゃね？

家に置いてあつた、小太刀を持つて、知り合いの剣術家の場所に行つてみた。

だが、そこには見知った剣術家の姿がなく、刀を持った女がいた。
ふと、地面を見ると、気絶している知り合いの剣術家に折れた刀があつた。

へえあの女がやつたのか

「何だ、やられちゃったのかよ、おっさん」

小太刀を持ちながら、女のほうに近づき、気絶している剣術家を踏み、言った

そうすると、女は此方に怒ったように闘氣を当けてくる

「くえ、やるのか」

小太刀を構え、闘氣を当けてくる女に向かう

痺れ鯰

まず、痛ぶつて倒そつと、女の斜め下に向けて小太刀を振るう。女は手裏剣を投げてくるが

そんなもん、お構いなしに、小太刀で弾きながら進む

しかし、女が動いたと思った瞬間、小太刀が後ろに飛ばされてしまった。

「へへー…やるじゃん、女ああー！」

腰に差している脇差しを取り出しながら、脇差しで斬り込む。

春雷

女に向けて、横を斬り払いながら、脇差しで突き、払い、と攻撃していくが

だがそれも、一瞬で終わり、いつのまにか、地面に倒れ伏していた

それでも立ち上がり、脇差しを女に向ける。

何度も立ち向かっても軽くあしらわれるだけだ、このまま女にやられてしままじや、今まで勝ってきたプライドが許さない

「くそがああああああああ」

秘劍・燕返し

無我夢中で放つたそれは、縦軸、横軸の軌道の弧を描く刃を同時に放つ。本来なら、三つの刃を同時に出す技だが、まだ完璧に再現できていないので一つの刃を放つ。ほぼ同時に放つではなく、完璧に同時に放つ二つの斬撃。

女の驚いた表情を最後に、気絶した

s i d e しぐれ

「秋雨……拾い物……」

「これは人じゃないか、どこで拾つてきたんだい？」

秋雨に差し出されたそれは、青い髪をした氣絶している少年であつた。

END

闇話（後書き）

ははは…燃え尽きたば

今田はまつ無理だ

第6話（前書き）

はい。懲りない作者がまたきましたよ～。
毎日毎日これ書いてる時に鼻血が出るのはなんでだろ？

第六話

学校に通うと、友人である白浜兼一がまたもや机に沈んでいた
また、何かあったのかな、どうせそうでないなら、園芸部で花に水
をやつしている事だし

同じよがた事を考えていたと思われる美羽風
兼一の周へ向かうと
と目が合つた

「兼一殿また何かあつたのか……？」

しかし兼一は、まるで何かに怯えてこらえきれないかの事に
反応をしめさない

者かによつて手を捕まれる

「む、何をする。美羽殿」

「何をするは貴方の事です!、兼一さんに何するんですかあ!」

「ちょっと田を覚ますだけだ」

話をそこで切り、再び兼一目掛けて手刀を振るおつとするが、またもや美羽に止められる
ええい！まだ止めるか

「仕方ない、直つたらまた来るか…」

一先ず授業が始まるので自分の席に戻ると、ちらりと見たが兼一が壊れたように美羽と話していたを見た。しかし、また大なんとかの時と同じふうになるとは…

体育の時間

男子はサッカー、女子は、バレー・ボールをしている中、美羽と兼一と新島が校舎の物陰で何か集まっているのを見て、自分もそこへいく。

校舎の物陰では兼一が体育座りをしていてガタガタ震えている、その横では美羽と新島が何かを話し合っていた。

「兼一殿はまだ直つてないようだな」

「あ、一騎さん」

「よお佐々木」

ガタガタ震えている兼一はやはりといつも、もつ負け犬のような田になつており、話が通じていなければ、何があつたのかを、横にいる一人に聞く

「どうあえず兼一殿のこの原因は何か分かるか?」

「ああ空手部の副将の筑波先輩が近い内しめるつて言つてるんだよ。」

「兼一殿も災難だなあ」

うん、災難すぎるな。」の間やつと危機脱出したと思つたらまた危機が迫つてきてるつて……

しかしながら、空手部の副将といえば、この間審判してた男だな。態度も悪く、教師には物凄く避けられて、教師が怖がるぐらいいの不良だったかな

「骨は必ず拾つてやるからな」

兼一の肩に手を置き、じや顔をしながら言つ。友人なら普通は言わないが、この男の場合、場合がやばすぎる。兼一は武術など一切やつていないので、相手は多少はやつていいという不良だ。

兼一がこの筑波という男を倒しても、不良として結構名が知られている者を倒したとしてまた違う不良に狙われるという負の連鎖が続

く

「一騎さん流石にそれは酷あざじやあつませんか？」

「まあ佐々木の言ひ事にも同意できるがなあ」

新島春男が、携帯程度の大きさの機械を手に持ちながら、美羽の後ろに近づいて、そのまま背負い投げをする。スリーサイズを聞こつとしたらしげが哀れ新島…

そのあと美羽が兼一に地図?と思わしき脇町だらけの紙を渡す。やのときの美羽の田は一高校生の田ではなく武道家としての田であつた。

その口は特に何もなく、放課後は梁山泊に向かつ

「師匠……」

梁山泊に着いたときに既に修行といつかそつこののは始まつていた。

道場破りが来てこらしめないので、門を飛び越えていくと、何故か師匠の鎖鎌に捕まつた

そのまま、道場のほうに拘束されたまま進むと、いかにも武道家といふ闘気を出している女の

道場破りがいた。

「剣と武器の申し子香坂しぐれ、一手！」指南頂きたい！

「いいよ……ただし弟子……元勝つた……らな……」

「ちよ、師匠、いきなり連れてこられてこれですか…」

師匠から道場で使っている太刀と正式な勝負ではいつも着ている青い陣羽織を貰い、改めて道場破りの所へ向き直る。見ると同じくらいの歳と思われる、顔には刀傷ばかりでそれでいて凜々しい外見をしている。

「女子は斬りたくないが仕方ないか…」

「むー…女と思つて見くびるなよ！」

ため息混じりに吐いた言葉に、相手は大声で反論する。

「では始めようか…剣と武器の申し子、香坂しぐれの弟子の佐々木一騎だ」

「月元流、月元彩だ。では…！」

その言葉を最後に二人の会話は終わった。月元彩と名のる女は薙刀を持っており、対する此方は太刀だ長さで言えば薙刀のほう有利だらう。

まず此方は相手の出方を見るため、太刀を構え、じっと待つ。

「先ほど余裕を見せてた割にはしないのか？」

月元は何もしてこない此方に対し、苛立ちを見せたのか挑発をしてくる。恐いくの女もの凄く短気だろ。

「ふつ」

挑発をあざ笑うかのように、口元を歪めると、それに怒った月元は薙刀を手に襲い掛かつてくる。

この程度の挑発に乗るとは……、内心この子大丈夫か?と思つたが今は勝負中、そのような考えをすぐに捨てる。

ブン!

月元が縦に振るつた薙刀を陣羽織をはためかせながら避けると、さらにそこから振り下ろし、突き、薙ぎ、と次々と薙刀を振るつてくる

「では、果たしあおうぞ!」

月元の攻撃をだいたい見切つたので、今度はこちらから攻勢に入る。

「ほれ

ビュン、シコ

「くつ」

月元に對して、一切の手加減もなく、本氣で戦う。その太刀からは变幻自在のような攻撃をしていて月元は攻勢に出れないでいる。太刀筋は横から斬るように見せかけて縦から斬つたりと、見切りにくい太刀筋である。

「そこだあああ！【月元流、星崩し】

「むっ！」

風流し

その襲い掛かる薙刀は一見ただの振り下ろしに見えるが、実際は凄く速く薙刀を振り下ろしている。

薙刀を避けれないと判断し、受け流すことにする。薙刀を受け流しながらも弾こうとするが弾けずにそのまま浅く肩を斬られる

「仕方ない」

鬼殺し

太刀を薙刀目掛けた振りで、月元がそれでよろめいている隙に太刀を首に突きつける。一瞬の間で、勝負はついた。月元は何がなんのか分からぬといふ顔をしながら首に突きつけられている太刀に驚いている。

「女子は斬りたくないのではな。敗北を認めるか？」

「あ、ああ、／＼／＼」

刀を仕舞い、微笑みながら言つと、月元彩の顔が赤くなり、顔を背けてしまつた。

そのあと彩は礼を言い、顔を赤く染めながらそそくさと帰つていつた。

こうして道場破りの件は終わつた。

第7話（前書き）

指摘などありがとうございます。それと間違つてストックを消してしまい遅れてしまった。今後、一週間、1、2回更新が限度かもしちゃうん

6月6日

はい、一旦修正やら過筆を加えるため次話は遅くなります。

自分でも、色々可笑しいなといつとこりが多々ありますので、それらを修正するので

次話投稿は6月下旬辺りとなります。

第7話

第7話

日曜日

今日は、朝から梁山泊に行くことになった。一応、道場破りにも備え、今度からは自分から愛刀と陣羽織を持っていくことにする。急に渡されて戦えと言われても混乱して駄目になるだけだから、修行に行くときも、予め想定していく。

「相変わらずの大きさの門だな…」

梁山泊に着くと、そこにあるのはとてもなく大きく、そして重い門がある。

だが門を開けるのだけに体力を消耗したくないので、普通に横から塀を飛び越えていく。

スタッ

「ふう、むー」

一息吐いたあと、一步前に出ると、侵入者撃退用の罠と思われる、繩を括りつけた丸太が此方に向かって、飛んでくる。

それを、横に飛んで避けると、カチッと嫌な音がなった。

「ぐう！流石にこれは…」

嫌な音の正体は、またもや侵入者撃退用と思われる罠、しかしこんなもの何回か門を開けないで此方側から来たときは何もなかつたのに、何故か罠が増えている

先ほどの踏んだ罠の正体は、四方八方からくる、竹の先が尖つている竹槍であった。

前方の竹のみを背に背負つていた愛刀、物干し竿の鞘で打ち落とし、前方に竹槍がなくなつた瞬間

全力で走り出す。

この間僅か数秒で、危機感知能力とは凄い物だ。

「はあはあ

気のせいか、門を開けたほうが良かつたきもする。必死に道場のほうまで着くと、その頃にはもう無駄に疲れていた。

「師匠、遅れて申し訳ない…」

道場の中では、既に師匠が刀を構えて待つており、下手に怒りせるとやばいので、早めに遅れた謝罪を済ませておく。

師匠は、それを構わないといつぶつな動作をすると、鎖鎌を持って此方に怪しい目をしながらにじり寄ってくる

「な、なにを」

「師匠……から弟子への愛だ……」

全力で道場の入り口のほうに駆けるが、流石に師匠は特A達人級、入り口に着いたと思った瞬間体に鎖鎌を巻きつけられた。

しかし、今日の私は違う！

腕の関節を、わざと外し鎖鎌から脱出しよろとする。だが拘束が緩んだ瞬間、師匠が目の前に立っていた

「ははは……無念……」

師匠に、また引っ張られ戻されるのを感じながら、間接を戻していく。

抵抗しても、もう無理だという事が分かるので、次に行く展開に備えておく

「師匠……？」「れはいつたい何を？」

「……修行だ」

渡されたのは、皓越時殿が作ったと思われる、まるでそれをおぶる
ような形を
している地蔵。

渡されたといふことは付けるといふとか..
仕方なくその地蔵を背中にせると、師匠が刀を構えたので、地蔵
をせおつたまま
此方も構える。

直後、師匠の刀が迫つてくる。

師匠が、此方の力量に合わせてくれるのはありがたいが、これでも
十分つらい

刀と刀を打ち合つ度、段々刀に力が入らなくなり、手が痺れていいく。
逃げるよつて、後ろに下がると茫然のよつて迫つてくる刀を避けな
がら
体制を整える。

すると、道場の入り口辺りから梁山泊に住んでいる人じゃない者の
氣を感じる

「むー」

「余所見…しちゃダメ」

ギイン

打ち合ひをしているといふ事を忘れていた所に、師匠の刀がきて、
気づいた頃には
自分の刀を弾き飛ばされていた。

師匠に謝り、弾き飛ばされた刀を取りに向かう。

その間、師匠が急に道場の畳と畳の間の襖に刀を差し込む刀が差し込まれた場所から、畠^ハと馬剣聖殿が出てきた。

「なんだ…いつものことか…」

大方、剣聖殿が師匠を盗撮にきたんだろう。ほぼ毎日のよつに起ころ事だ。

既にこのことには耐性がついている。

剣聖殿には個人的に頑張つて欲しい、盗撮した写真を時々買つているからだ。

まあ、なかなか高い値段だがその価値がある。

もちろん、買つていることは師匠やその他の人達には秘密だ。自分の家の秘蔵の

金庫の中に入れている。

思考が逸れてしまつたな。

弾き飛ばされた刀を拾い、外に出るとアパチャイ・ホパチャイ殿が何故か、岬越寺殿

の作つた地蔵を大量に破壊していつている。

いや地蔵だけではない、染山泊に生えている木も蹴りで折つたりしている。

もつそこらかしこが地蔵の残骸だらけだ…

「何が起つた…」

目の前に起きている事を逃避しながら、辺りを歩いていく。

第8話（前書き）

繋ぎだから短い。やつと更新したのに短い
しかもフレイヤと合わせたかったのに何故いつなつた

更新再開しますよ～

あのあと田原めた兼一が、この梁山泊に弟子入りすることになった。友としてなら止めたいところだが、兼一自身が意思をはつきり持つていたので止めないことにした。

というか、おそらくこのままだと兼一は件の筑波という輩に殺されはしないだろうが、大なり小なり怪我を負わされる可能性があるだらう。

そして今、兼一は真っ白に力尽きていた。

「大丈夫か？」

落ちていた木の枝で力尽きている兼一に、ちよん、ちよん、と突いて生きているかを確かめる。兼一がこうなった理由はたぶん修行の辛さだらう、岬越寺殿が乗つたタイヤを三つ先の駅まで走つていくななど、今まで武術などをしていなかつた兼一の体力では持たないだらう。

「ひ、もう無理……」

「おお無事であったが、見つけた時には既に事切れてゐたと思つたぞ

「あんなの修行じゃなによ……」

「まあやつぱりな、兼一殿。今やらなきゃ兼一殿があの先輩にやら
れて困るだらう

「ひ、確かに……」

少し話している間に、兼一が多少は動けるくらいに体力が回復した
ようだ。だが、まだ
完全に動けないので、よう、よう、と倒れそつなくらいな状態だ。

ふと空を見上げてみると、そこはもう夕暮れの景色になつていた。
時刻も6時を回るだ
らう。

「では兼一殿、先に帰らせてもらひ

「あーっちよ佐々木君待つてよ~

ボロボロな健一を放つておいて、梁山泊を後にして家に帰る。

気ままに歩いていく内に段々と周りが暗くなつていく。

「今宵は良い月が出そうだ……」

近道に細い裏路地に入るると其処には異様な光景が広まつていた。裏路地には数十人にも上る数の不良と思われる。男たちが呻き声を上げながら倒れていた。

その男たちは手足が逆のほうに向いていたり至る所に傷を持つている。

「何があつた……？」

「バ、バーサーカーだ……うう……」

一番近くにうめき声を上げている男に問うと、バーサーカーと言つ答えだけが返つてきてそれ以外は特に返してこなかつた。

見るとその男は完全に痛みで氣絶したようだ。この調子だと他の無事そうな男に聞いても意味がないだろう。

だが、しかし

「狂戦士とは面白い一つ名の者がいるな」

奥から大男が此方に向かつて進んでくる。それに合わせて竹刀袋から木刀を取り出す

この木刀は中に鉄の芯を入れていて真剣そのものと同じくらいの重

さという物だ。

「まだいるか、カタツムリがッ！！」

「月が美しい、戦いに相応しい月だ。貴様はどう思う？」

その身にそれだけの価値があるかな？

この夜、暗殺者と狂戦士の戦いが始まった

第9話（前書き）

あれ？・・・・・長く書こうと思つたのにたつた・・・これだけだと・
・・・え・・・？物干し竿？まだまだ使えない・・・
バーサーカー？なにそのかまs（ぐふ

はい、微妙な長さですが更新です。相変わらず戦闘描写が・・・

「お前はすぐに潰れるなよ！」

バーサーカーの拳が言葉と共に襲い掛かってくる。それを体を少し右に傾けて避ける

それに続き、蹴りや殴りをしてくる。

その攻撃はバーサーカーの名に相応しいほどリズムが読めなく、完全にランダムな攻撃だ

「ふむ、『無型』か。その名に相応しい型だが、ちと力不足じゃないか？」

迫りくる攻撃を最小限に避けながら、淡々とした口調で言う
事実、バーサーカーの攻撃が目に見えて分かるのだ。いくらバーサーカーに才能があったと
しても今のままじゃただ見切られて終わるのだ。

「クツカツカツカツカ！！」

「戦いが始まつたばかりなのに、狂つてしまつては楽しめぬではな
いか?」

「む!」

突如襲い掛かつてきた蹴りを木刀で受け流す。
木刀で受け流した理由は急に攻撃の鋭さなどを増したバーサーカーの攻撃が完全に見切れなかつたのだ。

だが
「なるほど、面白い!」

「ふはは…いいねえ。俺の戦いの渴きを癒してくれ…！」

「では、次は此方から往くとしよ!」

そう言いながら、バーサーカーに向けて鎖骨を狙い袈裟切りを放つ。

当然避けられるが、これだけでは終わらない。

袈裟切りから木刀の向きを即時に変えて逆袈裟斬りを放つ

ビュン

木刀は風を切る音を上げながら、バーサーカーの脇腹を切りつけた。

バーサーカーがそれを避けようとしたらしく、傷は浅い

やはり先ほどからバーサーカーの様子が可笑しい。脇腹を木刀とはいえ、切りつけたのに特に反応を示さない。

「クツクツク、 そうだ俺にスリルを味合わせてくれ！……『バーサクモード発動』」

ガツ！！

「ぐふつ」

急にバーサーカーは、先ほどとは段違いの速さで、此方に近づき顔を殴つてくる

ただ殴られるわけにはいかないので敢て、重心を後ろに下げ衝撃を和らげる

完全には和らげれないので、顔に痛みを感じる。

でも、それだけでは終わらない

右ストレート、アッパー、回し蹴り、跳び蹴り、とことん攻撃といえるような攻撃をしてくる。

その、あまりに变幻自在な攻撃に、完全に反応がしきれず体に傷が増えしていく。

「サツキマヂノ、イセイハドウシタ！？」

「オレヨタノシマセロ！…」

体の痛みを耐えながら、一いついつ一種の天才のような者のミス……つまり自分にとつては好機を待つ。ミスをしない人間などいない。完全な人間などいないのだ。

「ウララララララア——！」

次々と体に突き刺さつていく攻撃を今できる最小限に痛みを和らげるよう致命傷になり兼ねない場所の攻撃を体をずらして致命傷を避ける。

典型的な動のタイプだ

勝機は必ず来るはずだ、相手は完全に自分の力に飲まれ、半ば狂っているような状態だ

昔、前世で見た動のタイプとも言えるバーサーカー・ヘラクレスは狂っていても、その主の命令には絶対で守りつつもしていた。

自分が受け継いだ能力のアサシン……佐々木小次郎は、自分が架空の人物としても、嗤い

その僅かな時間を戦いを楽しむ事に費やした

なら、刹那という短い時間を自分も楽しんだほういいじゃないか

「シネ……」

そして待ちに待つた時が来た

風流し

バーサーカーが最後に止めを刺そうとする瞬間を、風流しで攻撃を受け流し、バーサーカーをよろけさせる。

だが、これだけでは終わらない、いや終わらせない
それから、手に持った木刀で弧を描き、自身が持つ秘技をする動作
に入る

「中々面白かった。敬意を持ってこの技で倒そう」

秘剣・燕返し

木刀から繰り出されるのは縦軸、横軸、囲む円の軌道の弧を描く刃
横斜め縦の3つの斬撃を、荒削りだがほぼ同時にバーサーカーに向
けて放つ

「ぐふっ」

バーサーカーが口から血を吐き出すのを見て、その場所を後にする

嗚呼、今宵の戦いは楽しかつた

第10話（前書き）

ははは……駄文なのは変わらないがとつあえず連続投稿するぜえ……
もつ無理だ……燃えぬきた
戦闘描写苦手、日常生活描写苦手　あれ？これ駄目じゃね？
はい、こつもの駄文ながらどうぞ！

第10話

第10話

兼一が結果的に筑波にやられた

やはり、校舎の窓から逃げ出ていた事がばれてそのままやられたようだ。

なんとかしてあげたかったが下手に行動をすると、そのまま兼一が更にやられる

可能性があった。

兼一がやられているのを、ただ目の前で見ることしかできなかつた。

今はもう僅かにしか残っていない原作知識が助けることを駄目だというふうに邪魔をしていたのだ

「……梁山泊に運んでやる」

校舎裏で気絶して倒れている兼一を背中に背負い梁山泊田掛けて走る

兼一はもう色々な処を内出血やら打撲やらしてボロボロな状態だ通行人は気絶している兼一を背負っている事にびっくりしているがそんな事気にしない

背負いながらの状態で全力で遁走している途中、兼一が目を覚めた

「大丈夫か…？ 兼一殿」

「佐々木君か…『じめん…』」

「何を謝る？ 私に出来る事は運ぶ事くらいしかできなかつた。舌を噛むから喋るなよ」

いつもの、おどけた口調を止め、真面目に話す。

それからと「いうものは、兼一は何も喋らなくなり、無言になつた。

梁山泊に着くと、まず先に兼一を岬越寺殿の所まで連れて行く幸い骨折などはしてなかつたようで、大丈夫だつた。健一を岬越寺の場所に置いていき梁山泊の庭に行く

「美羽殿、今は兼一殿に話しかけないほうがいい」

「え？ 兼一さんどうしましたの？」

無言を貫くと「いや」で逆鬼殿から思わぬ横槍が入る。

「やめとけー美羽」

「逆鬼さんー。」

「男にはな。『女にや見せたくない顔』つてもんがあるんだよーー。」

「では」

そう言い、その場を後にす。そのまま師匠の所に行き、修行をしていく。

いつも通り修行をきちんとしていく。

自分が他人に構っている時間は無い。今はただ修行をして強くなればいい

原作知識に在ったあの時までに

その翌日から兼一の修行は今までやらなかつた技の修行に入った

「兼一殿、死ぬなよ？」

「そういうなら助けてよー。」

「フツー無理に決まつていいだろ。私も危ない状況な『ビュンー。』
今掠りましたよね…？」

「余所見…よくない…」

兼一はアパチャイ殿とマッチト打ちならぬ地獄のスパーリング。そして自分は飛んでくる

手裏剣を避けたり、弾いていく修行

兼一のほうはアパチャイ殿が手加減ができるないので殴られて気絶することがよくある

自分のほうは、一歩間違えば手裏剣が刺さるどちらも危険だ。

だがこの危険なほど、その分上達するのが感じるので辞める気にもならない。

「む？ ビックリました。師匠」

「何を…生き急いでいる…？」

ぱっと目が見開く。驚いた、まさか師匠にこんな事を言われるなんて思つてもみなかつた

だが、ここは誤魔化さねばならぬ。

軽く疑われるほうが下手に知られるよりはマシだ。

「いや、生き急いでないませんよ？ 師匠」

「やつ…か…」

そつして、その日の修行を終えた。兼一のまつも、何やら逆鬼殿が教えたりしているので心配はないだろ？

結論から言つと兼一と筑波とやらの戦には兼一の勝利で幕を閉じた空手の技からの中国拳法、更に柔術か…

「兼一殿は、才が無い身でよくあそこまで出来るな…」

やはづ面白い

フツと軽い笑いが零れた

第10話（後書き）

D o f Dまでは内容だいたい構成できてるけど、これ書くとなると
きついなあ

第11話（前書き）

はい疲れました。10万アクセス突破＆1万5千ユニークアクセスが突破しました。ありがとうございます。あとがきのほうで軽いアンケートしてますのでよかつたらお願ひします

いつも通り、荒涼高校の授業を適当に受けて、梁山泊に向かう途中

「おや、逆鬼殿ではないか？」

「おひー、一騎か、ちょうど酒を買つてきた所だ」

「買い物帰りですか。自分は梁山泊に向かう途中です」

「んじゃ、軽く歩いていくか」

そう言い、梁山泊まで、一人の大男…逆鬼至緒と一人の優男風の男
…佐々木一騎が

一緒に歩いていた。通行人からすれば実に奇妙な光景だろう
逆鬼殿は酒が入った袋を担いでいるし

自分は、普段の学生服に鞆と一人のギャップが大きい

「ん？ あれは兼一と美羽じゃねえか」

「む、どこですか？」

「ほら、あそこの資材置き場だ」

そこまで言われて、田を凝らして逆鬼殿が指を刺している所を見ると、微かに一人に相手に何人も囮んでいるような光景が見てとれる。兼一殿はともかくして、美羽殿が居れば大丈夫だと思つのだがな

「兼一の様子を見に行つてみるか」

「大丈夫だと思いますが、承知しました」

あくまで、急がないで歩いていくペースで資材置き場に向かっていく

しかしながら、逆鬼殿は弟子をとらない主義と聞いているが、実際は兼一殿が心配なのかな？ そうでなければ岬越寺殿の修行や馬殿の修行をしている兼一殿を見ていないだろう。

そういうしている間に、兼一殿と美羽殿の所まで着いた

兼一と美羽はじつじりと狭められている

「いい雰囲気じゃねーか！？」

「兼一殿、大丈夫か？」

「逆鬼先生、それに佐々木君！…」

「いいな。楽しそうで。」

兼一は逆鬼殿が来た事で、困まれている状態ながらほっとしている。
でも、逆鬼殿は、ただ見に来ただけだと思つからまだほっとしちゃいけないのだがな…
対する、逆鬼も安心したような兼一をどこ吹く風といつぶつとしている

その様子を気に食わなかつたと思われるサングラスに木刀を持つて
いる不良が逆鬼殿に
襲い掛かつた。

「んだつーてめえら」

「逆鬼殿、こゝは自分に」

「おひ、んじゅ任せた」

逆鬼殿に襲い掛かつてくる不良に対して、逆鬼殿に許可を貰い倒すことにする

この程度なら、逆鬼殿なら一睨みで倒すだろうが、自分は試したいことがある。

「死ねやーー！」

「ではー。」

無刀取り

右足を前に大きく足を開いた姿勢に、背中を丸め両手をだらりと下げ身構える

不良が木刀で正面から斬りかかってきた瞬間に、不良の懷に潜り込み、その木刀を取り上げる

「え？」

「眠れ」

驚いた表情をしている不良の首に目掛けて手刀で気絶させる
周りの反応は以下の通りだ

逆鬼殿と美羽殿は至つて普通の表情をしており、兼一とその他の不良達は口をパクパクしていたりする。

「おう、片付いたか。んじや帰るぞ」

「承知」

兼一に何かの型を教えたらしい、逆鬼殿はもう用はなくしたという風に、帰ると言いそのまま帰ってしまった。

「アパチャイが探してたぞ。さつぞと歸れよ。」

「では、兼一殿に美羽殿」

逆鬼殿に遅れないよう、すぐに急いでいく

第11話（後書き）

10万アクセス突破を記念して閉話を作りたいと思います。

内容は

1・Fat eからアサシンこと佐々木小次郎との話

2・主人公がマジ恋の世界に行く話

3・しぐれとの修行を始めたばかりの初期の話

正直3はまったく構成が思い浮かばない。次の更新まで受付ますので
できれば、よろしくお願ひします

第1-2話（前書き）

はい、遅れました
だが相変わらずの駄文くおりてい
アンケート結果は2番に決まりました

田羅口

染山泊に行つてみると、兼一がもの凄く落ち込んでいた。

「兼一殿は、どうしたんだ？」

「ああ一騎吾か、どうも買い物から帰つてきたらあの調子なんだ」

「ま、青春は悩むためにあるよーなもんだー!ほっとけ」

修行にもならないくらい、落ち込むとなると、何があつたんだ？
兼一殿の事だから、また不良がらみだと思つが、このまま染山泊で
修行を続けていれば

大丈夫な事だろ?。

しかし、何があつたか心配だな。話しかけてみるか

「兼一殿、どうした？」

「ああ佐々木君か、ちょっとね……」

「また？不良絡みか？」

「うん……、今日襲つてきた不良の中にナイフを使つてきた人がいて
……ほら、僕ただで
さえ度胸が無いほうだから……」

「よつする、武器の対処法か、使い方を習いたいのだな？」

武器に関しては一人、もの凄く身近な人物がいるのだが、あの修行
を兼一が耐えれるか
が心配だ。金属製の物を持てば、たとえ、それが斬る物じゃなくて
も斬つてしまうような
人の修行だ……

しかも、その人……師匠が今兼一の後ろに立つて……多分、兼一の
話を途中から聞いていた
のだろう

「岬越寺先生あたりに、対武器戦を習つか……でもなんかとんでもな
い練習させられそう
だしなあ……」

「兼一殿、お~い兼一殿~」

駄目だ…気づいてない…完全に自分の世界に入ってしまった…、
その横では師匠が何かのアピールを
するように様々な武器を振るい続けている…
あれ?これ、このまま兼一殿が気づかなければとびっきりがきそつ
な予感が…

「う~ん、案外、逆鬼先生はていねいに…」

トン

師匠が兼一の、おでこに米粒を付けた

ピッシュンッ

兼一のおでこにある米粒目掛けて抜刀した

当然、急に何のことか分からぬ兼一は叫び声を上げている
しかし、米粒が見事に半分に切られている

「流石、師匠御見事」

「えつへん…」

「しぐれさん!何をしてますですか~つ~?それに一騎さんもそれ

を見てないで

止めてくださいー。」

「ははは、師匠を止めるなんて無謀な事できんよ」

実力差も一目瞭然なのに、止めようなんて無茶を通り越して無謀だ。

それに気づかない兼一殿が悪いー。（開き直り）

結局、師匠に教わることになつた兼一は道場に連れて行かれた
美羽殿とアパチャイ殿、それに馬殿がやりすぎないよう見張ると言
つてるが

危ない気しかしない…

むー。

「師匠、いきなり真剣は私じゃ無いんだし無理だと思つぞ」

「…ん、そつか…」

少し田を離した隙に、真剣を取り出し兼一に短刀を投げつけていた所だった。

あ…

兼一が短刀が急に飛んできたことに、腰を引けて、ためためと泣いている

師匠が懐からスプーンを取り出した。

「これならいいでしょう。」

「本当に？絶対？」

「いかん！師匠の場合、金属製なら「シユババババッ」…遅かった
か」

ピッ、パク、ズル、チン

兼一の持っているスプーンは両断され、道場着は細切れに、さらには羽の着ている服

も切られ、馬殿に写真を撮られている

そこへ、長老がやつてきた

「まあ、なんだ。要是当たらなければナイフもスプーンもしゃせん、
金属の塊にすざみて。じゃが、じぐれはどちりでも必ず当てるからのう。」

冷静によく観察してスキを探るのじゃー！」

師匠と兼一は新聞紙を丸めた物を手に修行を開始した。それと、美羽殿の写真を撮っていた馬殿がいつのまにか、長老に取り押さえられていた。

ナイフの構え方は真反身、使わない手は腰、体を真横にナイフの一直線上に体を隠す、か…

「兼一殿、腕を前に出しすぎだぞ」

「つわーー..」

腕を前に出しすぎていたせいで、そこを新聞紙で叩かれる

「ちょっと一騎ちゃん、しぐれどんと一回やつてお手本見せたらどうだね？」

「む、私がか？ふむ、ならやつてみるか。兼一殿ちょっと見ていてくれ

丸めた新聞紙を片手に師匠に切りかかる

パンツ

新聞紙と新聞紙が当たった乾いた音が鳴る。それを横に弾き喉に田掛けて
新聞紙を突く

グラン

師匠が後ろ側に引きながら、新聞紙でそれを抑える
師匠の隙が兼一とやつていたときより無く、攻めにくいたあと

それからも、パン、パン、と新聞紙が当たった音が鳴り、少し経つ
一気に攻めようとして、新聞紙を突くように振るつたが
横に弾かれてしまった

「ちよ……」

もちろん、それは見逃される筈も無く、首に新聞紙を突きつけられ
てしまつた。

「やはり無理か…」

新聞紙を離し、手を上げ降参といつづつに表現する

「まあ兼一殿、こんなふつだ」

「あ、うん、ありがと」

呆気にとられていた兼一に一言、言い先ほどいた所に戻る

第1-2話（後書き）

相変わらずの駄文ですね・・・

闇話エフ（前書き）

はははは…正直すまんかつた
予想以上に出来が悪い…

IF もしかしたら

「ここが川神院か…師匠も、いきなりここに行けばとは無茶を書つ」

目の前には、世界的に武術で有名な寺院、その名も川神院。この地を訪れる

者は皆、力を求めこの川神院に入門する。元は関東三山の一つ「川神院」。厄除けの寺院として名高く市の名前になるほど。「己を高め氣力で厄をも祓う」という考え方で鍛錬場所として有名。行事も数多く行われている。

「確か、川神鉄心という人を訪ねるつて言つていたな」

思案顔のまま川神院の門を叩く

「失礼。川神鉄心殿は、いるか?」

「ん? 爺に何かようか?」

対応に出てきたのは、白い羽織を肩に羽織つている強気そつな女であつた

「名乗り忘れたな…、剣と兵器の申し子香坂しぐれの弟子、佐々木一騎だ」

「へえ」

それを言つと、田の前の女は以下にも面白そつとう顔をして、此方を見てくる
できれば早く、川神鉄心殿に会いたいが、田の前の女の立ち振る舞
いを見て、それを諦める

「川神鉄心殿に取り次ぎ願いたいのだ」「ビュン」ぬー。

いきなり此方に向かつて、拳を突いてきた。当るわけにもいかない
ので、それを横に躱す

「やつぱり、このぐらいなら避けるか」一ヤ

「こきなり何をするー？」

今も一ヤついている表情の女に問う

「何、簡単な事だ。爺に会いたいなら私と勝負しろー。」

「私としては、早く鉄心殿に取り次ぎ願いたいのだが…」

内心、正直勝てる気がしない。

「うわ、なにをするー。」

「ここだと、爺達が煩いからな、ちょっとつこて来てもらひや」

いきなり首根っこを掴まれ、驚くほど速度で連れて行かれる。途中振りほどこうとしたが、掴む力も凄まじく振りほどけなく無駄に反抗しただけであった。

拉致……もとい連れて行かれる事、ほんの数分、多馬大橋の下、多馬川の土手まで来て、ようやく離された。周りには学生服を着た生徒と思われる者達が此方を見ており、人だかりができていた。

近くで会話が聞こえる「お、百先輩きたぞー」「キヤーッ」「挑戦者と百先輩どつち勝つかトトカルチヨ始めるぞー」「馬鹿、百先輩が勝つに決まってるだろ」

「今更、話を聞くわけないか…」はあ…

「さあかかる！」

において立ちしている田の前の百先輩と呼ばれた女に、ため息を吐きながら護身用に持っていた木刀を取り出し構える。
傲岸不遜な態度に、戦闘狂バトル・ジャニギな所、師匠達と相対したときに感じるのはつた威圧、まったくもって勝てる気がしない…

「致し方ないか…では逝くぞ…」

何か違つたような氣するが、気にしない

今の自分の全速力で駆け、目の前の相手に木刀で斬りかかるそれを手で軽くあしらわれるが、まだまだ食らいついでいく

鬼殺し

首、田掛けて当身を狙う

「なんだ、こんなものか？」

横に軽く躰される

「ぬう」

一旦、距離をとり、体制を整える。

「できれば、使いたくなつかたが…この際使うしかないか…」

それは、「剣と兵器の申し子」香坂しぐれ、に弟子入りして教えて
もらつた技の一つだ

今まででは、佐々木小次郎の技を自分の物にする為、使っていなかつ
たが本来なら使っても
いい技だ。

木刀を構え、目の前の女を見据える。

香坂流 相剥斬り

余裕そうに構えていた、右腕を寸分違わずに木刀で斬りつける。

それは、確かに右腕に当り、手ごたえがあつた。

なのに女は未だに余裕な顔を崩さずに、尚楽しそうに笑みを浮かべ
ていた

「や、れつぱなしも、面白くないな。そりそろ私からこぐぞー。」

その瞬間、先ほどまで相対していた相手が消えた

反射的に後ろを振り返つて見ると、不適な笑みを浮かべている女が一人

そして此方に右腕を振りかぶっている

その右腕には氣が込められており、当つたらただじや済まないだろう…

「ぐふっ」

当然、避けれの訳も無く当つ、土手の近くまで吹つ飛ばされる

「あ～あ、剣と兵器の申し子の弟子つて言つたから、やつたのこの程度か…」

「誰が、この程度だつて…？」

砂を掃いながら、立ち上がり残念そうな顔をしている女に言つ

「お、立ち上がるのか、そりゃなくっちゃ私が面白くない」

「ふんー。」

木刀を片手に持ち、余裕そうな顔をしている女に向かって、駆ける
女に向かって木刀を振りぬいた瞬間

「い、い、ああああー！百や、香坂殿の弟子がまだ来ていないと思ったら何
をしじるかあああー！」

女と自分の間に急に、立派な髭を携わえた老人が現れた。

その老人は、百と呼ばれた女にそのまま説教を始めてしまった。

「いったい、何だったんだ…」

聞話IEF（後書き）

アンケートに協力してくれた方々申し訳ない
予想以上の駄文に仕上がってしまった。
それと私にはマジ恋は駄目だった

第1-3話（前書き）

書き下ろしなので誤字、なまづかいもあるかも
後日訂正いれます。

いつもどおり、学校の授業を適当に受け答えて昼休みになつた頃
兼一はまた厄介な者達に目を付けられている。

その証拠に、サングラスに短髪の巨体な男と、いかにも優男そつな
男と小柄な男が
兼一を訪ねて、クラスまで来ている
現に今も

「白浜兼一はいるか？」

その様子に、クラスはもう怯えきってしまつていて
しかし、このクラスに兼一はもういない、既に屋上に避難してしま
つたのだ。

「うづつ！、ラグナレクの”技の三人衆”」

クラスメイトの誰だつたか？名前は忘れたが栗頭と尖がり頭が、心
底怯えるよつに言った

兼一も、こんなのに目を付けられるは大変だな～
こんなのに構つていたら時間が無くなるので先ほどまで飲んでいた
湯飲みを片付け

兼一がいる屋上に向かおつと教室を出ようとすると

「おい、てめえ、どこへくつもつだ？」

先ほどまで、暴れていたサングラスの目体に呼び止められた。

「いや、持ってきた飯だけじゃ物足りなかつたので購買にいくだけ
れ」

「ふんー。」

そう言つと、興味を無くしたように、そのまま振り返つてしまつた
そのまま、軽く自販機でお茶を買い屋上に向かつ

屋上にいくと、何故か兼一と新島が殴り合いをしていた

「これは…？美羽殿何故こうなつた？」

「あ、ああ一騎さんでしたか。これは男の友情ですわ！」

「いや、明らかに違うと思つが…」

何故か目を輝かせている美羽から目を離し、横で殴り合いをしてい
る

二人に向けて、軽く木刀で突いて元に戻らせる

「痛いつ！何すんのや」

「ぐ、佐々木でめえ」

正常に戻った二人は、此方を睨み付けてくる

「先ほど、クラスで三人組が兼一を訪ねて来たんだが、また厄介なのに
目付けられたなあ……」

「あ、そうだった。新島、早く情報をー！」

「まあ、待て、急かすな。ほらよ」

そつ言つと、新島は懐から学園ランキンギングという機械を取り出して
説明し始めた。

「宇喜田考造。3年生、名門の柔道場にいたが、勝つためにどんな
手でも使う品性の無さから破門！得意技はその巨体から投げ落とす
肩車。」

「ああ、そやつなら先ほど教室で暴れてたぞ」

「ええー！？」

先ほど、いた短髪のサングラスの巨体の事を思い出し、伝える。

案の定、兼一は驚いている

「やしき、やっぱいそうなのが、こいつ。この武田一基、3年だ
こいつは、なんと一元ライト級のボクサーだ！」

「ボボボ…ボクサー……つ…」

「ほお、序は違うが同じ名前とは運命を感じるなあ」

先ほど買つたお茶を飲みながら、返事を返していく
兼一の声が、やっぱいそうになつていて、梁山泊で修行する
なら恐りしく
大丈夫だらう。

そのまま昼休みは終りし、午後の授業に差し掛かっていく

やはつとこつか、授業は適当にやり過いでして放課後

兼一は、修行で培つた足の速さで梁山泊に走つていく

「兼一殿も、はやくなつたなあ…」

「毎日走つこんでいるだけ、ありますね

その後に続くように私達も走っていく

第1-3話（後書き）

はははは・・・馱文

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5234t/>

剣豪を目指す道

2011年8月30日19時39分発行